

道経塾

d o h k e i j u k u

「三方よしの経営」を究める

107

平成29年3-4月



特集

引き際

なぜ会社を愛するトップほど譲れないのか

の極意

ここに
注目

(株)ヘッズ代表取締役社長
暮松邦一

(株)ゴトウ経営代表取締役社長

特集4

(株)三寶会長
小川清之

特集3

(株)後藤昌幸

カレーhaus COCO 壱番屋創業者

特集2

宗次徳一

特集1

高田 明

(株)ジャパネットたかた前社長

企業に花咲く 「孝心」の種

当コーナーでは、「親孝行」な社員づくりに取り組む企業の実践事例を通して、企業において「親孝行」な社員を育てる意義に注目します。

縁あつた人を幸せに

親孝行は感謝の大本

「親孝行手当」で親孝行

「タニサケへ一昨年十一月に入社し、三月に『親孝行手当』として、『一万円』をいただきました。以前に働いていた会社にはない手当であり、今までにない考え方を持っている会社だと感じ、たいへん感激しました。この手当でお互いの両親と、『喜び』と『感謝』の気持ちを話しながら、楽しく食事をさせていただきました。親、家族あつての自分であることを再確認し、今後もさまざまな形で親孝行をしていきたいと思います」（木下直之）

社員がそんな感想を寄せる(株)タニサケでは、平成六年から毎年三月に「親孝行手当」として社員全員に一万円が配られ、各々が親孝行を実践する。

自然豊かな岐阜の山間に本社を構え、ホウ酸を使ったゴキブリ誘引殺虫剤「ゴキブリキヤップ」という爆発的な大ヒット



タニサケファンから贈られた花に囲まれて

(株)タニサケ 代表取締役会長
松岡 浩 (まつおか・ひろし)

昭和19年(1944年)、岐阜県池田町生まれ。大垣商業高校卒業後、イビデン(株)を経て、家業の「スーパーマツオカヤ」を継ぐ。60年、町の発明家、谷酒茂雄氏と害虫駆除剤製造販売の「谷酒生物公害研究所」(現(株)タニサケ)を設立。63年社長、平成12年から会長へ。「岐阜掃除に学ぶ会」代表世話人。著書に『ゴキブリだんごの秘密』(PHP研究所)、『喜びの生き方塾』(モラロジー研究所)など多数。

ト商品を生んだ同社。社員が主体的に取り組むカイゼン活動により、「日本一の知恵工場」としても注目され、見学に訪れる企業は跡を絶たない。三十七人の社員で経常利益は常に二〇〇パーセント以上、創業以来の黒字経営で、自己資本比率九七パーセントという優良企業だ。

明るくイキイキと楽しそうに働く社員と掃除の行き届いた清潔な社屋、温かく柔らかな社風が印象的な同社の礎を築いてきたのは創業者・松岡浩会長である。

先も立ち、我也立つ

松岡会長が二十五歳の時、突然勤め先に父親の計報の知らせが入る。それも、ようやく父親と会話ができる年齢になつたと思った矢先の出来事だった。実家に急ぐ道中、無念で涙がとめどなく溢れた。「親孝行のしたい時には、親はなし」、その実感が心の中で反芻する。また一方で、幼少期に実母を亡くし、その後繼母、祖母と三人の母に大切に育てられてきた恩を強く感じながら人生を歩んできた。

「私ができなかつた親孝行を、社員さんにはしてほしいという願いと共に、みんな

な『そろそろ親孝行したいな』と思っています。でも照れがあつてなかなかできない。そこで、この親孝行手当が社員さんの背中をポンと押すわけです」。社員が実行に移す一助になればと、この「親孝行手当」は生まれた。

「うちは自主なんですよ」と松岡会長は言う。手当を出しても、その実行を強制することはしない。しかし「縁ある人を幸せにしたい」という松岡会長の「想い」に呼応するように、社員は素直に実践し、心の豊かさを育んでいる。そんな実践事例の一端を紹介したい。

「自分の両親はすでに他界しているため、毎月仏前にお供え物をしています。妻の母親が高齢になり、また田舎で近くにお店がなく、交通の便も悪いため、前もって必要なものを聞いておいて、母親の顔を見に行きがてら届けています。母親はご飯を作つて待つていて、たいへん喜んでくれます。こちらも元気な顔を見るとホッとして安心します」（中嶋光男）

喜びの生き方塾



小冊子『喜びの生き方塾』(松岡浩著、モラロジー研究所刊)。明るく楽しい人生を送る秘訣がここにあります



月に1度、「お楽しみ食事会」を開催。旬の食材を使って、社員の社風委員が腕をふるう。おいしいものを口にし、しぜんと笑みがこぼれる幸せなひととき

親孝行だと思います

(竹中右佳子)

「なんだか照れくさくて、あまり話をすることもありませんが、いつまでも親がいると思わず、親孝行手当を利用して両親を喜ばせ、育ててもらった恩を少しづつでも返していきます」

(水野学)

同社の社是の一つに、「先も立ち、我也立つ」とある。相手のことをまず優先し、その結果自分を生かすところに本分があるといふものだ。松岡会長は、「幸せの方程式」として「感謝+欲望=幸せ」とも提示し、感謝の心より欲望のほうが強いと大きな幸せは訪れないと考える。

「感謝ができるようになると、人は幸せを感じ謙虚になつていきます。感謝の心が縁のある大きな人生をつくるのです。私はそうした感謝の心の大本が、親孝行にあると考へています。親への感謝は、人生を前向きに生きる大きなエネルギーになります」と松岡会長は言う。

自分や自社だけでなく、縁ある人々を幸せにする、同社を支える社員の心意気の根底には、感謝があり、その感謝の大本には親・祖先への孝心がある。

社内では、社員同士がお互いに美点を見つけ、感謝を伝える「ありがとうカー

ド」の活用も活発に行われている。

また、社員のカイゼン提案は毎年二千件以上に及ぶ。費用をかけずに自分たちの手で創意工夫し、効率化による生産性の向上も目覚ましい。

人を喜ばせて生きる

本社工場の出荷場所には、道路からも運送業者が確認できるように「有」「無」の札がかけられていた。これは一目で配送物の有無が見えるように、先方の立場に立つてのカイゼンが施されたもの。

「人を喜ばせて生きる。それしかない」。

そう実感を込める松岡会長の姿勢が、三十年かけて今の同社の社風を築いてきた。松岡会長が一貫して続けてきたものに、「早朝出勤」と「掃除」がある。「心磨き」のため、と毎朝幹部社員と一人「トイレ掃除」を続け十年経ったころ、社員も自主的に加わるようになつた。同社のトイレは驚くほど美しい。職場を続ける松岡会長の後ろには、親・祖先に孝行を成し、一隅を照らす心の美しい社員が連なつてゐる。

(本誌)



左・松岡浩会長、右・清水勝己社長。本社敷地内に平成5年に建立された詩碑「念ずれば花ひらく」(仏教詩人・坂村真民先生の詩碑)の前で